

Text Information

「テキスト論」は、文章を作者の意図から切り離して、そこに残された文章自体を対象とする考え方である。これを拡張し、環境に潜むデザインの構造を読み取る試みがテキストインフォメーションの意図である。
デザイン演習として以下の4つの視座が要点となる。

作者の死

都市計画やまちづくり、ストリートファニチャーやサイン計画などには、行政の思惑や作者としての設計者の意図が込められている。しかし読者＝生活者こそが主体となって日々街に暮らすなかで、この設計意図にすべてが沿うわけではなく、少なからずそこから溢れ出す。結果として渾然一体とした「街」という環境が作り出されるのである。

文字以外

具体的な演習では、ひとつのキーワードを手がかりとして、「街」の中から「テキスト構造＝デザインの対象」となりうる要素と関係性を発掘する。都市計画や建築、交通システムなどのインフラの仕組みを一旦離れて、街に生きられたモノやヒトの各々の関係性を発見する。ここにはそれぞれの街が持っている固有の雰囲気や本来の姿が映し出されるはずだ。

新たな視座

その新たなデザインの要素によって再び見えてきた街の姿を空間に再構築する。この演習の目標は、先ずテキスト概念を手掛かりとしてデザインのための新たな対象＝インフォメーションを獲得すること。そして研究の対象となる街の本質的な環境がその言葉によって構造的に語られることである。ここでの新たな視座の獲得はその表現の方法を抜本的に更新するはずである。

実装する力

計画立案から調査、制作、空間展示、そしてプレゼンテーションに至るまでの実体験を通して総合的なプロデュースの感覚を獲得することもまた、このデザイン演習の要となる。演習の中では街という時空をモチーフとするが、ここで獲得できた視座は、広告、ゲーム、映像、工業製品、Webサイト、広義のプログラム、ビジネスモデル開発などを対象としたデザイン方法論として、その応用展開の可能性が開かれる。

"The Death of the Author"
1967 essay by the Roland Barthes

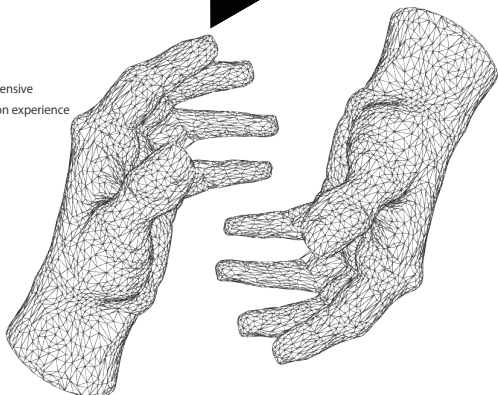


Non Verbal Narrative

From Paul Rand's popular Eye-Bee-M poster



Comprehensive
production experience



演習内容

[概念] + [プロセス]

環境に潜むデザインの構造を読み取るために、まず街という対象とデザイナーという主体との関係性から解いていく。新たな視座を獲得するための発想展開から観察の実施。さらにチームでの多次元の検討を経て、作品作りのコンセプトを固める。これに基づいた調査分析によって有意義なグループワークを進めることが可能となる。

Process Design

発想のトレーニング

グループの結成

テキスト構造の発見

グループの活動

空間展示

プレゼンテーション

プロダクションノート

Keyword
『前』

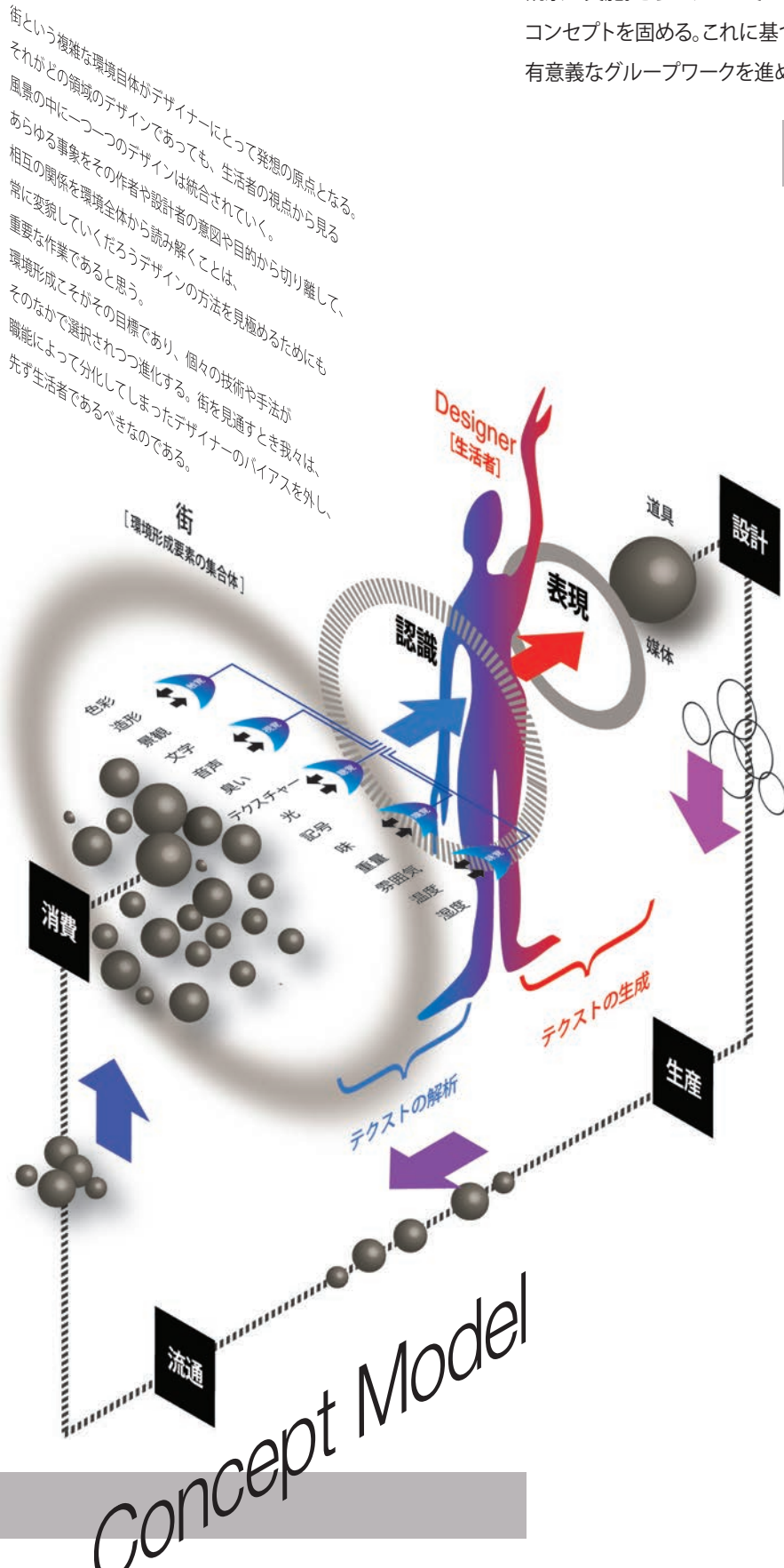
Area
『小平』

Team 01
Team 02
Team 03
Team 04

Team 01
Team 02
Team 03
Team 04

合評会

展示



Concept Model

キーワード [前]

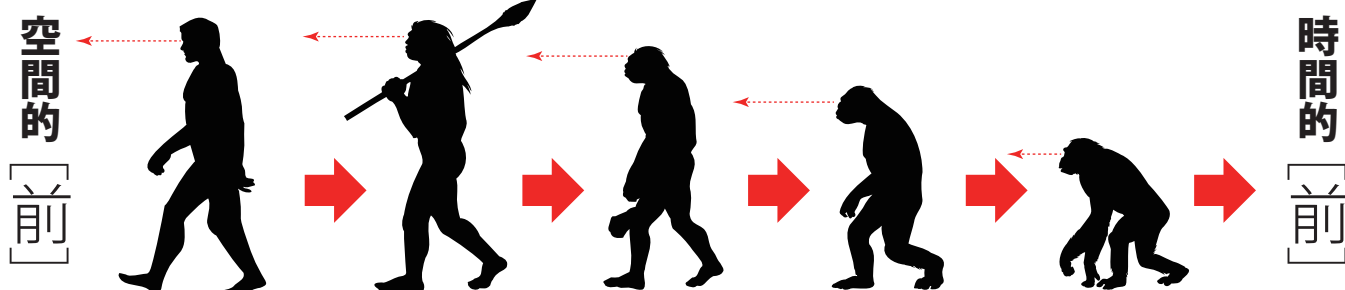
2020年度のこの演習を進めるに当たって、統一したキーワードとして「前」を採用する。
 まずここで「前」という漢字が表す意味について考える。この言葉は、空間的には主体の進む方向や向かう先を示し、時間的には昔、ある出来事よりも昔の「かつて」の方向に向く。
 空間的に捉える場合と時間的に捉える場合の方向が逆を向いているように感じられる
 パラドクスに陥る面白さが、「前」をキーワードとして採用する第一の意図である。

まえ「まへ」「前」の解説

- 「名」《「目(ま)方(へ)」の意》
- 1 普通の状態で顔または視線の向いている方向。おもて。前方。「まっすぐ前を向く」⇔後ろ。
 - 2 他人のいるところ。面前。「子供の前でそんなことは話すな」
 - 3 建物などの正面。表の方。「駅の前大通り」「像の前で記念写真をとる」⇔後ろ。
 - 4 その事柄に対した時の状況。「新企画の前に立ちはたかる難問」「厳格な規則の前には手も足も出なかった」
 - 5 連続するものの初めの部分。さき。「行列の前を歩く」「前から八番目の席につく」⇔後ろ。
 - 6 ⑦ある時点より前。「三〇分ほど前に電話があった」
 - ⑦以前。むかし。「前に会ったことがある」「前のことを持ち出す」
 - 7 順序の先のほう。「前からの約束」「前のページ」
 - 8 身体の正面の部分。また、陰部。「前をはだける」「前を隠す」
 - 9 前歴。特に、前科。「前がある」
 - 10 正面の庭。前庭。
 - 「ひとりしていかにかにせましとわびつればそよとも」の荻ぞこたふる」
 - 《大和・一四八》
 - 11 神の御身。神を直接指すのを避けて付ける語。
 - 「能く我がーを治めば」《記・上》
 - 12 神・貴人を敬っている語。
 - 「御」にも、えさはあらじとおぼしめしたり」《枕・八七》
 - 13 「前神」の略。「社」百九十八所……「百六座」《延喜式・四時祭上》
 - 14 連歌・俳諧で、前句のこと。
 - 「この一出で、座中暫(しばらく)く付けあぐみたり」《去来抄・先師評》
 - 15 女性の名の下に付いて、尊敬の意を表す。「千手(せんじゆ)のー」《平家・一〇》
- 「接尾」
- 1 名詞や動詞の連用形などに付いて、それに相当する分量や部分などを表す。「五人前」「分け前」
 - 2 名詞に付いて、その属性・機能などを強調する意を表す。「男前」「腕前」

デジタル大辞泉(小学館)より

進化論的に展開した空間的 対 時間的な「前」のイメージ



調査地域

[小平]

2020年度はコロナ禍に見舞われ、これまでと同じように自由な活動ができなかった。できる限り「密」を避ける観点から、今年度の調査対象地域として武蔵野美術大学が立地する小平市を選んだ。これまでの主な対象エリアだった中央線の駅周辺とは異なり、なるべく公共交通機関を使わずに移動できるのだが、妥協したこの選択は原点帰りとなり期せずしてたいへん有意義な結果を導いた。

小平市内には比較的乗降者数の少ない西武線の駅が7つ分散するエリアである。予めのイメージが掴みにくいのは、街の調査にとって、これはバイアスがかからないという意味では良いことだが、それでも何かしらの手がかりがないとこの演習の難度が高くなりすぎる。まず一般社団法人こだいら観光まちづくり協会に協力を仰ぎ、『小平』とはどのような場所であるか専門的な知見からの解説を受けて演習は始まった。

- 総人口: 197,109人
- 栽培発祥地: 昭和43年から日本で初めて農産物として栽培
- 農作物の直売所: 約200カ所
- グリーンロード: 21km「狭山・境緑道」「玉川上水」「野火止用水」「小金井公園」を結ぶ
- 大学: 7校 学園都市 20~24歳の年齢層が厚い人口構成
- 丸型ポスト: 37本 (保有数が都内自治体の中で1位)
- 7つの駅: 中央線経由、西武新宿線経由、新宿から25分と首都圏から近い利便性
- 自然: 「玉川上水」「野火止用水」幾多の用水路が巡る生物多様性の基盤の保全